武蔵野日曜集会

水と霊

――ヨハネ伝第３章１～15節――

１９８４年２月26日（武蔵野）
小池辰雄

パリサイ根性　無者となると本当の徴が出てくる　それと溶け合ってしまう世界に入る　体現できないものは本当の真理ではない　人生の決定的な峠　水と霊　十字架が私に無条件をくださった　御霊のキリストがわがうちにありて生きる　十字架と聖霊によって生まれなければ罪の贖いの象徴　聖霊は愛の霊

【ヨハネ3・1～15】

1 ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰なり。
2 夜イエスの許に来りて言う『ラビ、我らは汝の神より来る師なるを知る。神もし偕に在さずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』3 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず』4 ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争で生まるる事を得んや、再び母の胎に入りて生まるることを得んや』5 イエス答え給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず。6 肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。7 なんじら新に生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。8 風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処より来り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生まるる者も斯のごとし』9 ニコデモ答えて言う『いかで斯る事どものあり得べき』10 イエス答えて言い給う『なんじはイスラエルの師にしてなおかかる事どもを知らぬか。11 誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを証す、然るに汝らその証を受けず。12 われ地のことを言うに汝ら信ぜずば、天のことを言わんには争で信ぜんや。13 天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。14 モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。15 すべて信ずる者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』

●パリサイ根性

今日はヨハネ伝第3章の1節から15節です。

1ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰（つかさ）なり。過越の祭でキリストはエルサレムに居られたわけですが、これはエルサレムにおける出来事です。「パリサイ人（びと）」というのは「分かたれたる者」という意味で、自分たちは普通の人たちとは違った宗教的な、特別な人間たちだという自負を持っているご連中です。モーセの律法を非常によく知っているし、またよく守るということで、宗教的に少し上位の人間と自負している。そういうのをパリサイ根性といいまして、キリストはそういうのは大嫌いなんです。人をすぐ批判したり、見下したり、己をよしとしたり、自己義認者ですね。そういった代名詞みたいに「パリサイ」という言葉はなってしまっているわけです。宗教で、とかくいわゆる熱心な人がへたすると、

「私たちの宗教はいいんだ」

といったようなことで、パリサイ根性になる。私が育ってきた無教会が、ややもするとそういう傾向をもって教会と分け隔てをする。そういう相対的な比較研究をしているうちはダメなんです。

キリストはそういう自己義認者、パリサイ根性を、

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

と言って非常に激しく攻撃された。マタイ伝23章に七度もそのことを言っておられる。偽善者だと。キリストは自己を義としませんでしたから。

「善き先生」

と呼ばれたら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまのほかに善いものはあるか」

と。それで、私はキリストのことを

「何も無いひと、己を何者ともしない者、無者」

と言っている。だから、「無者」はパリサイ人のちょうど正反対なものです。まぁ、そんなことを言い出したので、無教会から私は嫌われてしまって、アウトサイダーにされてしまった。一向さしつかえない。

キリストの直弟子の最大の弟子のパウロがもともとパリサイ人だった。彼はパリサイ人のチャンピオンだったんですよ。キリストを信ずる者を迫害して、ステパノを殺すのをよしとした。パウロというのは共犯者なんだ。けれども、そのことにあとで気がついて、非常に彼は平伏してしまった。それで今度は全くキリストの最大の弟子になってしまったわけです。まぁ何でも、人はひっくり返って本当に神のものになることが一番の大事なことなので、その前はどうであったっていい。その問題を今、キリストがこれから言おうとしている。

●無者となると本当の徴が出てくる

この「ニコデモ」というのはユダヤ教徒のあいだでは尊敬されている人でしょう。「ユダヤ人の宰（つかさ）」というのは――「サンヘドリン」という衆議所、議会がある――その議員の、しかも上の方のひとです。ところが、イエスのことを聞いて、ひそかに尊敬している。けれども、表向きキリストのところへ行くと、

「なんだ、あれはパリサイのくせに、新しい新興宗教のユダヤ教に反しているやつのところへ行くか」

と、みんなに批判されるので、夜ひそかに他の人にわからないようにイエスのもとに来た。

2 **夜イエスの許（もと）に来（き）たりて言う『ラビ、我らは汝の神より来る師なるを知る。**

「ラビ」というのは「先生」ということ。「私たちはあなたが神さまからやってきた先生であることが分かっています」と。

神もし偕に在（いま）さずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』

この言うことは、答案は満点の答案なんです。「神我らと共に」というのが「インマヌエール」ということ。

「神さまが一緒だからあなたは不思議なことをなさるけれども、一緒におられないならば、あなたが行うこれらの徴は誰もできない」

と。「徴」というのは「セイメイオン」という字で、

「内側にあるものが外に現れたもの」

が徴です。普通これを「ジンボール」（独　象徴）といいます。象徴主義をジンボリスムスという。そういう外に現れる徴ばかり求めるのは、へたすると、御利益宗教になる。何か御利益が出ないと信じない。一般の民間宗教は御利益宗教が多いわけです。日本でもごらんのとおりですが。

しかし、徴は御利益のための徴ではない。徴を見たらば、その徴の奥の世界に入らなければダメなんです。それでなければ本当の信仰ではない。

「病気が治された、だから信ずる」

なんていうのではね。病気が治されたという現象、徴の奥の世界に自分の魂が入っていかなかったならダメです。病気が治ったり治らなかったりいろいろですから。しまいには死ぬんですから。問題は死んでも死なないような世界、徴の奥の世界に入ること。

キリストは彼自身が最大の徴です。最大の徴はキリスト自身。

「我を見しものは父を見しなり。私を見たものは神さまを見たのだ」

と言えるひとはキリストのほかにいない。自分を何ものともしないひとがハッキリそのことが言えるわけです。

だから、キリストは神さまの現象体ですから、キリストに来て、キリストという徴と同じ同質の徴に自分自身がなっていかなくては。「キリスト者」というのはキリストの徴を体

現する者ということ。体で現す。それでなければ本当はキリスト者なんて言えないんです、「クリスチャン、クリスチャン」なんて言ったって。なろうとしたってダメなんだ。そのためには、徹底的に無の世界に入る。無者となると本当の徴が出てくる。

●それと溶け合ってしまう世界に入る

「神さまが一緒におられないならば、これらの徴は誰もなし得ない」と。仰るとおりです。「神共にいませば」とあるが本当は、「共に」ではダメなんです、神が内にいまさなくては。「神内にいませば」です。神が内住しないことにはダメ。これが大事なことです。内住でも内在でもいい。これが「イン・ゴッド」「神の中に」ということ。キリストは「神の中に」というひとです。「ウィズ」ではない――でないとは言えないけれども、「ウィズ」という面もありますけれども――大事なのはこの「イン」の方です。我々も「イン・クライスト」、キリストの中に入る。だから、「エン・クリスト」と言っている。我々の雑誌の題名はそういうわけです。外から信じたってどうにもならない。

我々は空気の中にいます。空気を思って生きていない。空気の中にいて空気を吸っている。空気と人間の体は離すことができない。自然的生命はそういうものでしょ。霊的生命も同じことです。魂の世界でその中にいなかったら、「信ずる」の「信じない」のと言ったって、そんなのはお話にならない。そういう信仰は観念信仰という。仏教だって、一流の坊さんはみんなその世界に、お釈迦さんの中に、如来の中に入っているようなわけだ。

いや、このことが無教会時代には、私には来てなかったですよ。無教会の先生方はそこまでハッキリ言わないものな、観念的には時には仰ることがあったって。だから、

「信仰、信仰」

と言って、信仰が凝り固まってしまう。雪が降っても、だんだんそれが固まってしまうみたいにね。柔らかい雪でなくては。こんなに楽なことはない。

「水はH_2Oである」ということが解ったってどうにもならない。そんなことは知らなくたって、水を飲めばいい。飲む世界、食べる世界、吸う世界。それと溶け合ってしまう世界に入らなければね。それを一如という。一つとなる。

「怨（じょ）」という字があるでしょ。これは「相手の心の如し」という字なんです。だから、「おもいやる」という字なんです。

「孔子の教はこれ怨なるかな」

と。おもいやりだという。人の心の中に本当に入って、その人の気持になってみる。それが本当のおもいやりというものだと。漢字は素晴らしいでしょ。漢字というのは世界最高の文字ですよ。人の心の如しという。「怒」はダメだよ。これは、あの奴といって怒る心だ(笑)。面白いね、漢字というのは。

今は本当におもいやりが少なくなってきたね、世の中は。この間違った民主主義はとん

でもない。身勝手主義だ。民主主義じゃないんだから。

動物は、ものを言わないけれども、人の心に非常に敏感ですよ。うちには犬がいるけれども。犬はもう動きでもってわかる。こちらの動きでもってサッとこちらの心を読む。動物は非常に直感力が強い。だから、動物も決していい加減にとり扱ってはいかん。みんな魂がある。

どうして、日本はこんな妙なことになってしまったかね。一番悪いのは教育者だ。教育者自身が宗教的な心を持たないで教育できるかというんだ。小学校から大学に至るまでダメです。まぁ、いろんなことを言いたいけれども、あんまり脱線するのはよそう。

●体現できないものは本当の真理ではない

3 **イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、**

「まことに誠に」という時には、本当に懇ろに仰るときですね。「アーメン、アーメン」という字です。「アーメン」という字は「然り、まこと」ということ。それから「エメツ」という「真理」という名詞ができますけれども。あの「真理」という言葉は、へたすると観念的にとられて困る。

「我は道なり、生命なり、真理（まこと）なり」

という。「真理」の「理」の字がとかく躓きになる。へたすると頭の方にずれる。自然科学的な真理には、それは大いに――カントが純粋理性批判でやったように――ありますけれども、生命の世界の真理というのは、実現しないようなものは真理ではないんです。

だから、むしろ「道」と言いたい。真理が身についているのを道という。茶道、弓道、柔道という。みんなこれは道です。身についている。体で現ずる。体現できないものは本当の真理ではない。キリストが言っている「まこと」「誠（まこと）」というのは、「言が成る」という。言ったことは必ず成るという、これが本当の真理なんです。

「言うは易（やす）く、行うは難（かた）し」

なんて、あんな二段構えの考え方をしたらダメなんだ。

まぁ大変なひとですからね、キリストというひとは。だから、聖書にきて、

「聖書はどういう意味だ」

なんてやっているうちはダメだと、私は言っている。

3 **イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、**
神の国を見ること能わず』

「あらたに」という字はギリシア語では「上から」とも読める。人はあらたに新生しなければ神の国に入ることができない。「上から」というのは場所的な概念で、「新たに」というのは時間的な概念だ。どっちも含めていい。天的に――天生なんていう言葉はないけれども――天から生まれる。新生です。

4 **ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争（いか）で生まるる事を得んや、再び母の胎**

に入りて生まるることを得んや』

次元が違うものだから、こういう馬鹿げたことを言う。キリストに言われると、パリサイ人の代表者みたいなやつがこんなことを言って、まるで違うでしょ。福音書の会話をみていると、絶対次元からものを言っているひとと、相対的な判断から言っている人といかに違うかということがわかる。

「どうして、またお母さんの胎の中に入って新しく生まれることができるか」なんて、何をバカなことを言っているかと。

5イエス答え給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず。

今日はこの「水と霊」という題にしたわけです。

6肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。7なんじら新(あらた)に生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。8風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処より来り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生まるる者も斯のごとし』

●人生の決定的な峠

今度の『エン・クリスト』17号は非常に大事な号です。６頁の上段のまんなかあたりから読みます。

「文学作品を景観に譬えるとするならば、ゲーテの『ファウスト』、ミルトンの『楽園喪失』、ダンテの『神曲』、藤井武の『羔の婚姻』はいづれも壮大、雄渾、壮美なるもの、私の魂を感動させて余りある景観で、生涯をかけて愛読するであろう。しかし唯一の例外者がある。それはわが全存在を圧倒するものである。曰く、聖書！

聖書というのは驚嘆驚倒する本です。棚に飾っておく本ではない。

ところでこの聖書に圧倒されるようになった峠があった。それは大阿蘇の深山幽谷にある瀧見荘に於ける集会であった。一九五〇年の晩秋十一月三日から五日にかけての深い白熱的な聖書集会であった。手島郁朗氏と私が交互に聖書を講じ、且つ祈祷会をした。そのときに私は私としての未曾有の体験をした。即ちいきなり天界から聖霊の降臨にあづかった。

これが「新たに生まれる」ということです。

異言が迸った。全身がみ霊に震撼した。

しびれてしまって動けない。合掌した手が離れない。

これが聖霊のバプテスマであった。聖書のヴェールがとれた。聖書の言の次元がからだに感得されてきた。キリストが「わが言は霊なり生命なり」と言い給うていることがからだで受けとられ出した。意味ではない、現実である。解釈ではない、力の体受

である。見られる文字ではない、聞こえてくるひびきである。研究して解るの解らないのではない、身読して圧倒されること、降参することである。

聖書の現実に、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの特にこの福音書、この前にぶったおれなければ、これに圧倒され降参しなければ、その世界に入れない。

かくて私はハッキリと預言者や特に使徒たちの次元に入れられた。キリストのみ霊を受けたからである。これは私の人生の決定的な峠となった。私に対して一線をひいた無教会グループに別れを告げざるを得なくなった。手島兄は手島兄らしい道をひたむきに走った。「原始福音」の大集団がおのずから展開している。人間のいとなみには夫々の長所と欠点がある。大切なのは、個人にせよ、どんなグループにせよ、教派にせよ、集団にせよ、つねに新たにおのれを乗り越え、おのれを蹴破って前進することだけである。ひとがどうだこうだではない。私はそんなことにもう関心も興味もない。何より自分が問題にならない。こんな者を問題にしても始まらないからである。第三の峠を迎へたらそういうことになった。

第三の峠とは何か。『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻）で告白されている現実である。キリストの十字架で「無」を賜り、キリストの聖霊で「無限無量」なるものを賜った事態である無即無限無量の質的絶対恩恵の絶対次元の霊的現実である。表現できないキリストの本願の祈りの現実である。キリストの無者とされ、エン・クリストの大愛、霊愛の現実である。云々」（小池辰雄主筆、『エン・クリスト』第17号、１９８４年2月冬季号、曠野の愛社刊）

と。こういうわけです。この一段は非常に大事な一段です。これに

「本当にそうだ」

と共感するまでは始まらない。どうして、クリスチャンはいつまでも自分を問題にしているんですかね。そんなものは問題にならないじゃないですか。キリストだけです。自分をキリストの中に投げ入れてごらんなさい。えらいことになるから。祈りというのは、祈り入ること、全身を投入することです。お願いすることではない。

●水と霊

だから、そうすると、

「人あらたに生まれる」

ということになる。「水と霊」とキリストが言われたのは、「水」というのはもう旧約聖書からたくさんある。出エジプト記にもレビ記にも民数記略にも出ている。水で清めるのは日本でもそうだ。宗教でなくても、水というのは清めに使うものね。いろんなものを洗うのでもみんな水だ。体を洗うのも水だし、いろんな食べ物の器を洗うのも水だし。とにかく、空気の次は水が一番大事な元素です。

四大という。地水火風。空。空でも気でも風でもいい。ギリシア語やヘブライ語ではみんなこれは同じ字です。霊もそうです。全部同じ。ヘブライ語では「ルーアッハ」、ギリシア語では「プニューマ」という。霊風だ。

「どから来て、どこへ行くかを知らず」

とキリストが仰ったのがまさに霊風なんだ。霊という風、霊という気なんだ。「地水火風と空」のことを仏教では「五蘊」という。空でも無でもいい。これは無限無量の無です。虚無の無ではない。ニヒリズムと間違えては困るですよ、この無は。限りなしということ。

それで、水で清めをやる。まぁ、いろんな妙なことが書いてあるよ、旧約をみると。嫌になってしまう。こんなことをして清めてなにするかと。また汚くなるんだから。日本の清めもそうだ。神道の悪口を言うわけではないけれども。シェークスピアのどこかにあったね、

「人を殺した血の臭いはいくら洗ってもとれない」

と。そういうようなものです。けれども、とにかく水は、相対的な意味における清めには非常に大事なものですからね、清くするには。

キリストがなぜ、この時に、「水」と言ったかというと、水のバプテスマのことを仰ったわけです。即ち、洗礼のヨハネがヨルダンで悔い改めの水のバプテスマをやっていた。キリストはやって来て、ヨハネが、

「あなたは私からバプテスマを受けるようなひとではありませんよ」

と言ったんだけれども、

「いや、私は受けるよ」

と。キリストはなにも悪くはないから、悔い改めの必要のないひとだから、キリストは我々に代わって悔い改めてくださったわけです。ヨルダンの川の中に全身を浸して、そしてあがってきたら、霊が臨んできた。聖霊が鳩のごとく臨んできた。福音書の始めの方に書いてある。キリストは、「水と霊」と言ったのはそのことなんです。悔い改めのバプテスマをすると、聖霊のバプテスマに預かる。まず初めは、前段階は悔い改めです。

「悔い改め」というのは、「悔いて改める」という意味もそれはありますけれども、それよりも大事なのは――もともとそういう意味ではない――回転すること、回帰、回り帰ることです。神の方に向かって自分の存在を廻り帰らせる。魂ばかりではない。全存在が神に向かって廻り帰ること。それが本当の「悔い改め」の積極的な意味です。そうすると、聖霊が入ってくる。

●十字架が私に無条件をくださった

聖霊をただいきなり受けようとしたって、それは無理ですよ、この悔い改めをしなくては。悔い改めでも現象的には霊の力が、ある時には聖霊は来ますよ。けれども、それはまだ決定的ではない。この悔い改めを決定的にしてくださったのがキリストの十字架である。

「お前たちはいくら悔い改めたって、ちょうど水で洗うのと同じことで、またダメではないか。またもとのもくあみになるではないか。我執から本当にとられているか」

と。「罪」というのは我執です。己に執すること、我執が罪ですから。みんな人間は我執、エゴイズムなんだ。誰でもエゴイスト。

「万人はこれ罪びとなり」

というのは、誰でもがエゴイストですよということ。そのエゴイズムを持っていないのがキリストだけなんです。「自分を何ものともしない」のだから。

「私は何も言えません、何もできません。なぜ、私のことを善いと言うか」

と。彼は本当に自分を無能者、無力者、無善者となしている。だから、自分には断然、執していない。無我なんです。キリストは我が無い。無我者なんです。だから、「無者」という。そこには神が百％に臨んできた。

「０＝∞」（ゼロ＝無限大）

というわけだ。

信仰というのはそういう質のものなんです。

「私の信仰はまだ薄いから、どんどん信仰を強くしましょう」

なんて、くたびれてしまうよ、そんなことは。要らないんだ、信仰は。私は自分の信仰に絶する。絶信の信という。その信は上から賜った信で、私の信仰ではない。だから、凄いことになるんです。

まぁ、こんな楽な、そして楽しくて力のある世界はないのに、なぜ、みんなその一番無条件の世界を条件付けて水を割ってしまうんですか。無条件です。しかし、その無条件は、私は手放しで自分でできたのではない。十字架が私に無条件をくださったんです。人間小池は相変わらずダメな野郎ですよ、死にいたるまで。けれども、その奥に、

「十字架でお前に、もう完全に自我からすっとばされた世界をやっているではないか」

「はい、ありがとうございます」

と、受けとる。そうすると、そこから、そこに聖霊が臨んでくる。

なぜ、こんなハッキリしたことを無教会の連中が本当に受けとらないか。それで、

「小池は無教会から外れておかしくなった」

と批判する。

「ああ結構です。おかしくなったと、何と言われたって、そんなことは問題にしない」

と私は言っているんだ。無教会というのは何かポーズがあって嫌だよ。全世界を敵にしても、私はこの真理から外れるわけにいかん。お釈迦さんの世界の真理も、第一流の坊さんたちのものも私は尊敬しますよ。けれども、私においてはこの十字架を外すわけにいかない。

これは無条件に賜ったんだから。過去の我も現在の我も未来の我も全部、十字架されてしまって問題ではない。いくら私を問題にしたって、どう悪口言われたって、抗弁しませんよ。

「ああ結構でございます、何とでも仰ってください。私はキリストに生きてますよ」

と。そういうわけです。

●御霊のキリストがわがうちにありて生きる

「水」とキリストは言われたけれども、これは水以上なんだ。本当は火だ。水も火も両方とも霊に譬えられている。ヨハネ伝４章にくると、水が霊に譬えられている。ペンテコステへいくと今度は、聖霊は全く火の炎だから。「水火相(あい)いれず」ではなくて、水火相いれてしまっている。水と言おうが火と言おうが結構です。この場合の「水と霊」と言っているこの「水」は「悔い改め」の方の意味の水です。

「向き直りの、平伏しの、申し訳ありません」

という方の水です。その「申し訳ありません」に対しては、キリストが、

「全部、私が引き受けたから、もういいよ。もう省みなくていいよ」

と言う。日に三度省みたってしょうがないから、

「日に三度こっちを見てくれ。三向してくれ。三遍こっちへ向かってくれ」

ということだ。自分を三度省みたってしょうがない。大事なのは、

「自分を見るよりか、神・キリストの方を見てくれ。お釈迦さんを見てくれ。如来の世界に入ってくれ、光を受けてくれ」

と。こういうわけです。

十字架されると、これはもう聖霊は必ずくるんです、ぶっ倒れると。

「我キリストと共に十字架せらたり。我もはや生くるにあらず。キリストわがうちにありて生くるなり」

というのは聖霊のことだ。御霊のキリストがわがうちにありて生きる。パウロの言っているガラテヤ書2章20節はもう何回言ったってしょうがない。これをプロテスタントは金科玉条にしていながら、それを観念的にだけ受けとっている。命題として、信仰箇条としているのはダメです、本当に現実になっていなければ。

もう、皆さんは、そういう意味で大変なクリスチャンなんです、私が今言っているこの現実を本当に受けとっていれば。なぜいつまでも、

「まだ私は……」

なんて言っているんですか。それは百年河清を望むがごとしで、「まだ私は」なんて言っていたら、いつまでたっても始まらない。だから、さっきの『エン・クリスト』17号に書いたでしょ。自分なんてものは、考えたって始まらない。そんなものは問題にならないと。そういう世界に青年諸君も入ってくださいよ。勉強したって楽しくてものすごく力が出て

くるから。勉強なんていう言葉は要らなくてなってしまう。ただ親しめばいい。楽しいなぁと言って。

シラーは、

「人間が本当に人間であるときは、遊んでいる心だ」

と言っている。遊び心だと。最後の境地は遊び心なんです。学ぶも遊ぶも一如の世界に入ってしまう。何でも、この遊び心です。楽しくてしょうがない。本ものはみんな楽しい世界です。苦しみは、それは伴うよ、相対的な現実だから。けれども、楽しみが湧いて、喜びが湧いてしょうがない。力がくるから、そうなんだ。上から力がくる。疲れを知らない人になる。眠くはなっても。

眠るのは、キリストの中に、懐の中に眠るんですよ。そうすると力がくる。私は不思議な夢を見てしょうがないんだ、明け方ぐらいに。楽しくてしょうがない。そうすると、翌朝は復活したような気持で起き上がってくるからね。

私はまとめて何時間なんて祈らないですよ。早いんだ、私のは。そしてまた、いついかなるときも祈りの世界に入れるから、私は別に決めて祈りの時間なんてのはない。人はいろいろだから、いろんな在り方でいい。人間はいろいろな在り方で結構です。

北海道の何とかさんはよく祈るから、

「しかし、君、あまりそれをやっていると、弓もあまり張りつめると弦が切れるから、少し気をつけろ」

と書いてやった。それでは奥さんがやりきれなくなるからね。しかし、その人は素晴らしい。高等学校の模範的な先生です。八方破れが一番強い。構えのない構えというやつ。そのうちテレビで宮本武蔵をやるようだから、よく見てやろうと思う（笑）。私はああいうのを見るのが好きなんだ。

●十字架と聖霊によって生まれなければ

「人あらたに生まれずば」

という。人は「水と霊」によって、即ち、「十字架と聖霊」によって生まれなければ、神の国に入ることができない。

「あらたに生まれれば必ず神の国にもう入っている」

ということです。

「…でなければ、…でない」

という言い方をしたときには、

「…であるなら、…である」

と積極的な読み方をしてください。

「我に居らずば、何ごともなし能わず」

とキリストが言われたら、

「我に居れ。しからば何ごともなし能う」

と読む。私みたいな乱暴な講義をするやつはいないだろうな。「聖書の御言」とか何とか言って、みんなもったいぶってしまってさ。聖書の御言だって、これは言い切れないで困っているんです。叫んだり呻いたりしている。ただ言葉づらではない。

「儀文は殺し霊は活かす」

という。

私はなにも皆さんに怒っているのでもなんでもないですから、これは間違えては困るですよ。そういう気合でものを言っているんです。

6**肉によりて生まるる者は肉なり、**

と。即ち、第一の誕生は、我々は相対的な人間だ。しかし、この肉は決していい加減にしてはいかん。神さまから賜ったからだですから。パウロが「肉」という言葉を「罪」と同じ意味に使っているが、この場合の「肉」はそれとは違う。相対的な存在ということ。霊肉渾然としている。霊肉渾然として救われるのが、これが本当の救いだから。魂だけではない。今度は、肉体に対して霊体というのが、霊のからだが与えられる。

霊によりて生まるる者は霊なり。

と。コリント前書15章をちょっと見てみようかな。復活のことを非常にパウロが言っているところです。39節、

「39**凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉あり、獣の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり、**40**天上の体あり、地上の体あり、されど天上の物の光栄は地上の物と異なり。**41**日の光栄あり、月の光栄あり、星の光栄あり、此の星はかの星と光栄を異にす。**42**死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、**43**卑しき物にて播かれ、光栄あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦えらせられ、**44**血気の体にて播かれ、霊の体に甦えらせられん。**

これです。

血気の体ある如く、また霊の体あり。45**録して始の人アダムは、活ける者となれりとあるが如し。而して終のアダムは、生命を与うる霊となれり。」**（コリント前15・39～45）

「終のアダム」というのはキリストのことです。キリストは「生命を与うる霊」である。十字架にかけられても彼は甦って霊体となった。あれは肉体ではないですよ。霊体となって現れてきた。だから、自由自在です。まぁ、おったまげたろうね、本当に。大変なひとです。お釈迦さんの方は涅槃とか何とかいうんだけれども、キリストは露に現れてきたんだから。

7**なんじら新に生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。**

このギリシア語の「生まるべし」の「べし」は強いんです。生まれないではいられない、生まれざるをえないということ。

8 **風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処より来り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生まるる者も斯(かく)のごとし』**

それでは見えるかというと、霊は見えやしないよ。もちろん、霊的な異象が見えることはありますけれども、そういうことをキリストは言っているのではない。

ハッキリと魂に神の霊が、キリストの霊が臨む。十字架を通らない霊は聖霊と言わないんだ、十字架を受けとらないのは。だから、地上におけるキリストはいきなり弟子たちに聖霊を与えなかった。

「私は十字架にかかって、それから天界に行って、それから聖霊をくだすから、祈って待っていろ」

と。ということは、

「贖罪をしなければ、お前たちに聖霊をやるわけにいかない」

というわけです。この構造がハッキリしていない。罪の贖いをしたら、そうしたら聖霊を与えると言う。だから、十字架と聖霊は離すことができない。しかも、十字架が土台だということを、なぜプロテスタントもカトリックもハッキリ言わないかね。おかしいね、本当に。パウロがそれをどこかでハッキリそう言ってくれればよかったのに。言ってないけれども、言ってなくてもいいよ、キリストはハッキリそうなんだから。

「私は今お前たちに聖霊をやるわけにいかない。受くべきバプテスマ、十字架を通ってから、それから聖霊を与える。そうしたら、私が言ったりしたりしたことがみんなわかるぞ」

と。そうでしょ。こんなにハッキリしているのに、ただ「十字架、十字架」とやっているんだ、教会も無教会も。片一方は十字架ぬきで、「聖霊、聖霊」とやっている。ダメだよ、どっちも。みなさんはハッキリしてくださいよね。もうハッキリしていると思うけれども。

●罪の贖いの象徴

ヨハネだって、

「世の罪を担うところの羔(こひつじ)を見よ」

と言っているんだ。羔とはキリストのこと。

9 **ニコデモ答えて言う『いかで斯(か)る事どものあり得べき』**

何を言っているかね、これまた。

10 **イエス答えて言い給う『なんじはイスラエルの師にしてなおかかる事どもを知らぬか。11 誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを証す、然るに汝らその証を受けず。**

この「知る」というのは頭ではないですよ。全存在で受けとっている事態を「知る」というんです、このヘブライ語の「知る」というのは。体験しないものは、決して「知る」と言えない。頭で知っているものは、「知る」とは言わない。この「知る」は普通に我々が使っている「知る」と違う。体で知っているんだ。体知です。体知なんていう言葉はないよ、ないけれども、そう言いたいところだ。からだで知っている。実存的な知です。また、

「見たこと、聞いたこと、つらつら手で触ったこと、神の言」

なんてヨハネ書簡に書いてある。

この証を受けなければどうにもならないと。キリストが特に「信ぜず」と言わないで、「受けず」と言っている。信受でも体受でもいい。「体」という言葉は全存在という意味ですから。キリストもあきれてしまっているわけだ。

12 **われ地のことを言うに汝ら信ぜずば、天のことを言わんには争で信ぜんや。**

13 **天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。**

今、この地上においての救いのことを言っているのに、天界のことを言ったら、なおさらわからんねと。

13 **天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。**

ダニエル書7章に出てます。

14 **モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。**

十字架にかかること。この「べし」もそうです、「挙げられざるをえない。必ずそうなるよ」と。

15 **すべて信ずる者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり』**

「荒野にて蛇を挙げし」とは、民数記略に妙なことが書いてある。21章4節から、

「4 **民はホル山より進みゆき紅海の途よりしてエドムをめぐり通らんとせしが、その途のために民 心を苦しめたり。5 すなわち民 神とモーセにむかいて呟きけるは、汝等**

「汝ら」ときたね。

なんぞ我らをエジプトより導きのぼりて曠野に死なしめんとするや。ここには食物も無くまた水も無し。我等はこの粗き食物を心に厭うなりと。

こんなことをしていたら、曠野にみんな死んでしまうと。

6 **ここをもてエホバ 火の蛇を民の中に遣わして民を咬ましめたまいければ、イスラエルの民の中に死ぬる者多かりき。**

この「火の蛇」というのは霊的なものです。

7 **これによりて民 モーセにいたりて言いけるは 我らエホバと汝にむかいて呟きて罪を獲たり。**

そうなんです。それだから、火で、霊火で焼かれるわけです。

請う汝　エホバに祈りて蛇を我等より取りはなさしめよと。モーセすなわち民のために祈りければ、8エホバ、モーセに言いたまいけるは汝　蛇を作りてこれを棹の上に載せおくべし。すべて咬まれたる者はこれを仰ぎ観ばなお生くべし。9モーセすなわち銅をもて一条の蛇をつくり之を棹の上に載せおけり。すべて蛇に咬まれたる者その銅の蛇を仰ぎ観れば生きたり。」（民数記略21・4～9）

と。ひどいことが書いてある。即ち、「銅の蛇」というのは罪の贖いの象徴になるわけです。それでキリストはこんなことを言われた。

「私は蛇ではない。私は羔で、みんなの罪を贖うんだから、そのように私を受けとれば、そうすれば、永遠の生命を受ける」

と。聖霊が永遠の生命を持っているんです。

●聖霊は愛の霊

キリストの十字架で――「水」と言ったって、我々は本当の意味では悔い改めができないんだから――十字架で本当にその方向転換の決定的なものをキリストはくださって、

「もう罪は全部私が贖ってしまった」

と言う。だから、祈り入っていると、知らないまに聖霊が臨んできて、

「なんだか知らないけれども力がきました。楽しくなりました」

という経験をご自分でなさらないうちは、私が何べん語ったってしょうがない。

そして、この聖霊は愛の霊です。生命の霊と言ってもいいし、愛の霊と言ってもいいし、要するにその質は、根本の生命の質は愛なんです。また、聖霊のことは

「助け主」「パラクレートス」

とも言います。これは「パラカレオー」という、「そのわきに呼ぶ」という意味なんです。そのわきに呼んで、本当に代弁してくれる、味方をしてくれる、味方となってくれるもの、別な我となってくれるもの、というような意味を持っています。

まぁ、聖書の「霊」のことだの「水」のことだのを引用して言い出したらきりがないから、今日は止めますけれども。もう大変です。方々に出ている。こんなにも聖書には霊のことが書いてあったかと。そうだね、一か所だけ見るかな。エゼキエル書。預言者はみんなエホバの霊によって生きていた連中ですから。36章25節、

「25清き水を汝等にそそぎて汝等を清くならしめ

水を注いで清くするということは日本でもどこでも同じですよ。

汝等の諸の汚穢と諸の偶像を除きて汝らを清むべし。26我新しき心を汝等に賜い新しき霊魂を汝らの衷に賦け、

この「霊魂」は「霊」「ルーアッハ」という字なんです。

汝等の肉より石の心を除きて肉の心を汝らに与え、

「石の心」というのは固い石の心ということ。「肉の心」とは、この場合はいわゆる「肉」ではない。生きた生命の肉の心ということ。

27吾霊を汝らの衷に置き汝らをして我が法度に歩ましめ吾律を守りて之を行わしむべし。」（エゼキエル36・25～27）

本当に霊が来なければ、本当の意味で律法は行えない。その角度は非常にここによく出てます。それから、37章は有名な「枯骨の復活」の記事です。枯れた骨がつなぎ合わせられて復活するというような非常に不思議なことが書いてある。今のエゼキエルのところに「水」と「霊」のことが出ているから、非常にこれはおもしろいですね。

ヒルティは『眠られぬ夜のために』の「12月23日」のところでこのヨハネ伝3章のことを非常に書いてあるところがあったと思う。

やはり、ゲーテは言っているね、

「神は、生きているものに作用するのであって、死んだようなものには作用しない。神性というものは、常に展開してやまないところのものに、また変わってやまないところのものにおいて働くのである。出来上がったものや、硬化してしまったようなものには働かない。」

と、ゲーテも生命がいかに大事であるかということを言っている。彼は本当にそういう意味において、「神・大自然・我」というものが生命的なところに生きていた魂です。